

教員のための外国人児童生徒への教育方略



内容

外国人児童生徒への日本語、教科教育は日本の多くの教員養成大学・学部とは異なった知識理解が求められる。日本語教師養成を担う大学(外国語大学・学部など)の多くは、日本語を外国語として教育することを目的としている。このため、日本の学校という状況に合わせた教科教育についての知己が十分でないことが多い。また、教育対象を成人学習者と設定していることが多い。一方、小学校教員・日本の各教科教員養成を担う大学・学部は、教科教育の指導法の精緻化に余念がない。しかし多くの場合、教育対象が日本人児童であるので、言語・文化的配慮がされていないが多い。上記の課題に取り組むべく、以下の4点の内容を含む、9回の講座により構成する。

1)外国人児童生徒のおかれている背景と望まれる支援体制

外国人児童生徒を日本の学校に受け入れる際、学校長・担任・教科担当・支援者がどのような立場で、どのような役割を担うべきかを理解する。外国人児童生徒の支援について、クラス担任に過度な負担とならないように、それぞれの立場の者が認識すべき具体的職務を理解する。あわせて、地域の状況に合わせ、どのような支援体制を学校と地域間で敷くべきかを理解していく。(3回)

2)子どもの言語能力・学習能力

「言語能力」には、大きく2分される能力がある。まずは、状況からのヒントが多分にあり比較的短時間で日本人レベルに追いつくことが可能な「会話能力」がある。次に状況からのヒントが乏しく、文言から高度なメタ認知能力を働かせて理解しなければいけない「学習言語」がある。それぞれがどのような能力なのか概略を説明する。また、最初に外国人児童生徒を受け入れる際、子どもたちがどのような言語レベルにあるのかを理解する方法についても説明する。(2回)

3)授業作りのポイント

各教科内容に合わせ、どのような言語配慮・活動が考えられるかを説明する。文部科学省が管轄する「海外子女教育、帰国・外国人児童生徒に関するホームページ」内には、「学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について(最終報告)」が掲載されている。これを基に、授業をデザインする際、教科内容と日本語表現をいかにして組み合わせるか考えていく。(2回)

4)当事者の声

兵庫県下には外国人特別入試枠を設け、海外から直接生徒が入学可能としている高校が5校(令和6年から6校)存在する。そのうちの1校の教員に、現場の教育側がどのような体制を敷いているか、またどのようなことを心掛けて教育に取り組んでいるかをインタビューしている。また、私たちはともすれば「外国人児童生徒」が一方向的に支援を受ける側と捉えがちである。しかしながら自身で「生きる力」を育み、日本社会に根差している外国人児童生徒も大勢存在する。動画作成者との対談から、元外国人児童生徒がいかに言葉とアイデンティティを育てていったかを明らかにする。

以上の計画に基づき、セクションごとにポイントの解説を行う。理解確認についてはオンラインで課題を設け、実践への応用について受講者自身が具体的な計画を論述するようにデザインする。

講師（所属等は令和6年3月時点）

兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 准教授 竹口智之